

---

# 変態超能力をプレゼント

ヒイツツカラルド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変態超能力をプレゼント

### 【Zコード】

Z2845Y

### 【作者名】

ヒイツツカラルド

【あらすじ】  
もしも、変態になるけど超能力が貰えるとしたら、君は貰いますか？

## プロローグ

すべての授業が終わり、帰宅部の生徒たちが下駄箱の並んだ玄関から見える正門を目指して歩いて行く。

その横で運動部の生徒たちが、青春を費やして取り込む各競技に爽やかな汗を流していた。

県立蓬松高校の、放課後の景色である。

「なあ、龍

۴۷

## 二人並んで歩く男子生徒。

背の高い生徒が、自分よりも背の低い生徒に話しかけた。

声を掛けられた生徒は、視線を少し上に向けながら返事をした。

背が高いと述べても175センチはある。

背の高い生徒の方が、大き過ぎるのだ。

おやぢのとじぬ190センチはあるだらう。

「なあ、暇ならカラオケでも行かないか？」

「えへ、またかよ……」

嫌そうな顔で言葉を返す生徒の肩に、長身の生徒が腕を回す。

「いいじゃあねえかよ、行いづぜー」

「どうせお前の歌の練習だら、一人で行けよ」

「連れね~こと言つなよな~」

長身の生徒は、身長は高いが細身である。

髪型は坊主頭に近いが金髪に染められており、ブレザーの制服もだらしなく着こなしていた。

若干だがチャライ。

彼の夢は、ミュージシャンに成る事らしい。

しかし、顔は整っている方だが、メロディーは整っていない。

「お~りだつたらいいよ。だつて俺、今月の小遣い、あと一500円しか残っていないんだもん」

今月が始まつて今日は10日目である。

月の小遣いは5000円だが、貰つて直ぐに無駄使いを友好的にしてしまつたのだ。

暫くは糊口をしのがなくてはならない。

「おーいる金が俺に有ると思つか、龍～」

「じゃあ、ひとつで行けよ。俺は一昨日買つた本を、家でゆっくり読んでいるからよ」

実のところ、欲しかつた本は買ひきれてない。

「あ～……」

今度は長身の生徒が嫌な顔を浮かべる。

「またオカルト雑誌か？」

「何か文句有るか。俺が世界の不思議に興味を抱いて何が悪い？」

「そんなことだから女にモテないんだよ。龍～はよ～」

龍と呼ばれる少年には彼女が居ない。

今年で高校一年生になる。歳は17だが、一度も彼女が出来たことがない。

顔は悪くは無い。だが、平凡な顔をしている。

成績も悪くは無い。だが、優秀な科目も無い。

スタイルも悪くは無い。だが、オシャレでも無い。

運動神経も悪くない。だが、体育の授業でも立つたこと無い。

性格も控えめなところがあって、自分から前へ前へといった感じはない。

まさに、平凡な高校生である。

その上、異性の前だとやたらと緊張してしまって、会話が上手く出来なくなる。

だから、女子にもモテない。

名前は、まなぶ政所じゆしょ龍一りゅういち。

親しい友達には『龍一』と呼ばれている。語尾を延ばすのだ。

龍一の「の字を、語尾を延ばす意味合いで使っている。

彼はファミリーネームで呼ばれる事を嫌っていた。

小さな頃から『まんじゅう』と言つた前の響きのせいで、随分と揶揄された事があるからだ。

長身の生徒の名前は、おがさわ小笠原おがさわら卓巳たくみ。

龍一とは、高校に入学してから知り合つた友達であるが、今では一番の親友と呼べる仲であった。

一年二年と一緒にクラスである。

ちなみに彼には彼女が居る。

二人は何気ない日常の会話をダラダラと交わしながら駅前を目指して歩いていた。

田舎でも都会でもない町並み。  
大通りには車が轟めき合つて走り、背高い近代ビルが立ち並んでいる。

しかし、ビルの脇に在る小道に入つて行けば、100メートルも進まないうちに住宅街に変わる。

一気に下町風景に変わってしまう。

凶悪な犯罪も少ない平和な町であった。

卓巳の自宅は、電車に乗つて三駅越えた先にある。

龍一の家は、駅を越えた裏側の更に20分ぐらい歩いた所にあった。  
まだ20年ものローンが残つているが、父親自慢の一戸建てである。  
両親と姉での四人暮らしであった。

「じゃあな～、龍～。また明日～」

「またな～」

二人は駅前で別れる。

卓巳は駅の改札口を手指して行くが、龍一は駅前に在る本屋へと足を向けた。

今月の小遣いで買えなかつたオカルト本を立ち読みする為であつた。

龍一が本屋の前に到着すると、不思議そうな顔で足を止めた。

五階建てのビル。

一階二階は、すべて本屋だが、三階テナントには喫茶店と美容院が入つている。

四階五階は、会社事務所が幾つか入つていた。

本屋の名前は『三田邸堂』。

このビルの私有者は、この三田邸堂の店長の父親である。

いつも龍一は、この本屋で本を買つ。

ここで手に入らない本は、顔見知りで仲の良い店長にお願いすると、取り寄せてくれる。

しかも、本が届くと携帯電話にメールで知らせてくれるし、お金がない時は来月の小遣いまで待つてもくれる。

だから龍一は、インターネットで本だけは買ったことが無かつた。

それどころかここ数年は、この本や以外で本を買ったことが無い。

この通いなれた本屋ビルの前で、龍一が足を止めた理由は、本屋の入り口から離れたビルの端に、小さな机に行灯と水晶玉を置いて椅子に腰掛けた老婆の姿があつたからだ。

小さな机の前には、A4サイズの紙で『占い、五千円』と書かれていた。

「占い師か……」

とても気に成る老婆であった。

矮躯の背を丸めて、ただじつと椅子に腰掛けている。

その顔は皺だらけで頭も白髪であった。

老婆の前を、幾人もの歩行者が過ぎていくが、誰もが老婆に視線すら向けずに無視していた。

龍一の足は、自然と老婆の方へと進んでいた。

「占いですか？」

老婆に声を掛ける龍一。

声を掛けてから自分でも驚いた。

どちらかといえば人見知りで内気な自分が、進んで見ず知らずの人には声を掛けるとは。

上から見下すような龍一を老婆がゆっくりとした動きで見上げた。

細い目から僅かに黒目が見える。

「お客様じゃあないよねえ」

老婆が言った。

龍一は、思わず「うん」と一言返す。

密では無い。

1500円しか持っていない。

5000円は、円の小遣いに匹敵する金額だ。

幾らオカルト好きでも、占いなんかに一円分の小遣いは出せない。

では、何故、自分は、この老婆の前に立つて、声まで掛けてしまつたのだろうと疑問に思つた。

その疑問に自分で回答を出すよりも早く、老婆が話しを続けて来る。

老婆の声は、乾いているが穏やかで優しかつた。

「じゃあ、欲しいのかい？」

「欲しい？」

「違うのかい？」

何かくれると言つだらうか。龍一は、僅かに首を傾げた。

「貴方は、超能力が欲しいのでしょうか？」

「えつ？」

はつとする龍一。

唐突な言葉だった。

超能力とは、やはりあの超能力の事だらう。

サイコキネシスとか、テレパシーとか、テレポーテーションとかだらう。

何故に占い師の老婆が、唐突にそのような事を言い出したのか理解が出来なかつた。

だが、龍一の心にイカヅチが落ちたような衝撃が走る。

超能力とは、オカルト好きの龍一が欲して成らない夢の能力であつた。

家の勉強机の上で、何度鉛筆を手で振れずに動かそうと念じた事か。

授業中、隣の列の四つ前に座る女子生徒に、振り向いてくれとテレビを送つた事か。

放課後、女子新体操部の更衣室を遠目に、分厚いコンクリート壁を透視しようとした試みた事か。

だが、凡人の中の凡人である龍一には、そのような超能力が備わっていた訳でもなく、幾ら好きでオカルト本を読み漁つたとしても、備わる訳でもなく、ただ悔しい涙を飲み続けてきた。

欲しい。

龍一は、年中欲しいと懇願していた。

それを。

それを、この老婆が見破ったのである。

一瞬、龍一の脳裏に占い師とは恐ろしげ心眼を会得しているのかと、脅威にも似た尊敬の念を抱かせた。

「超能力、要らないの？」

「要ります……」

老婆の言葉に龍一は、ポロリと本音を返してしまつ。

「じゃあ、あげてもいいわよ

「えつー!？」

心臓が止まりそうな程に仰天した。

だが、同時に警戒心も高まる。詐欺かと疑う。

「差し上げてもいいけど、どんな超能力が貴方に備わるか、私にも分らないわよ」

頭が混乱する龍一。

とても疑わしい話だが、超能力が欲しいのは、子供の頃からの夢である。

怪しいが、この場を離れられない。

「お金は、持つていませんよ……」

ついつい口に出た言葉であつたが、老婆は皺だらけの顔を微笑まして「お金は要らないよ」と言った。

「じゃあ、何か他の物を要求するとか、何か条件でもあるのですか？」

「別に何も要求はしないわよ。じつて言つなら、『恋』かしらねえ

」

老婆は言いながら頬を赤らめ横を向く。

ちゅつとキモイ。

「でも、条件はあるわよ」

視線を龍一に戻した老婆が言った。

やはり何かあるようだ。再び警戒を強める。

「私は誰かに超能力を上げられるけど、どんな能力が目覚めるかは指定できないの」

「選べない？ サイコキネシスとかテレパシーとか、どんな能力が備わるか分らないと」

「難しい事は分らないわ。でも、様々な個性的な能力が生まれるわ。私の超能力は、他人の心にある未知の扉を開く能力なの。だから、上げると言うより、鍵を開けるような感じかしら」

「この人も超能力者なのかと龍一は驚いた。

「鍵を開く……。人間のブラックボックスを開くように……」

「呴くように言った龍一の言葉に老婆が反応する。

「そうそう、昔の事だけど、私が超能力をあげた人が、私の能力を『パンドラキー』とかと呼んでいたかしら」

「パンドラキー。」

「パンドラの箱を開ける鍵を意味する能力なのだろう。」

「心のブラックボックスを開けて、超能力者として目覚めさせる能力。」

「この老婆は、今まで何人の超能力者を生み出してきたと言うのだ

るつか。

「まだ、条件はあるわよ」

「ほかにも?」

この時点で龍一の警戒心は、好奇心に飲まれていた。

条件と言つのが、超能力を貰つ為の代償でなく、貰つた後の事を話しているからであった。

棚から牡丹餅状態の話に、目が輝き始めている。

「超能力を得た人は、仲間内では異能者と呼び合つわ

超能力者が他にも沢山居るよつたよつだつた。

更に老婆は話し続ける。

「異能者になると、一つだけ性格が変わるのよ

「性格が変わるのですか……」

それは何だか嫌だと思つ。

「一つは、異能者は、異能者同士でしか恋愛関係に発展できなくなるのよ」

「異能者は、異能者しか愛せない?」

「 わうなのよ……」

そう言い老婆は俯き加減で溜息をついた。

恋愛話ならば、龍一には関係がない。

恋人も居ないし、今後出来る気配もない。

17歳にして半ば諦めムードである。

龍一は、一つ目の性格変化を何気なく無視した。

「 一つ目は？」

「 一つ目はね、新しい趣味のよつなものにも田代見めぢやつのよ

「 新しい趣味ですか……」

何を言いたいのか分らない。

「 そう、今まで好きでもなんでもなかつたものが、急に大好きになつたやつだの」

「 なるほど。本当に新しい趣味が芽生えてしまうのですね」

「 わうわう、急に服のセンスが変わつたり、味覚が変化したりするの。酷い人は、ウンコが大好きに成つたとか、そんな例もあるわ」

「 ちょっと待つて下さい。ウンコが好きになるつて問題でしょー。」

服のセンスが変わるぐらいは良いが、ウンコが好きになるは、文化人としてダメダメだろ?と声を荒立てる。

「聞いた話だと、ウンコの写真を取りまくっているらしいわよ」

「しゃ、写真ですか……」

味覚が変わるの後にウンコの話がでたので、食するのかと勘違いしていた龍一は、誤解があつたのだと分かり僅かに安堵した。

「Uの二つの条件が飲めるのならば、貴方を異能者にしてあげるわよ」

「無料で?」

「ええ、タダでよ」

腕を組みながら龍一は、親指と人差し指で自分の顎を摘まんで考えた。

超能力は、とても欲しい。

子供の頃から懇願して止まなかつた夢だ。

しかし、ペナルティーが怖い。

どのような超能力を獲得できるか分らないのに、変態的趣味が備わるもの考えものだ。

素晴らしい超能力を得られるならば、多少の変態趣味に目覚めても

我慢できよつ。

だが、なんの役にもたたないゴミのような能力を授かつたうえに、ウンコを愛でるよつた趣味を好むよつになつた、それこそ人生の終末を遂げてしまつ。

実に恼まし。

この天秤のバランスは、博打の要素が強い。

龍一は、喉を唸らせ悩みに悩んだが、やはり結論は一つだった。

それでも超能力が欲しい。

龍一の覚悟が決まる。

少年が老婆に向つて深々と頭を下げた。

「僕に、超能力を下さい。僕を異能者にしてください！」

礼儀を正した龍一に白髪の老婆が微笑む。

「後悔しないわね？」

「はい！」

頭を下げたまま大きく返事を返す。

その頭に老婆が皺だらけの細い両腕を伸ばす。

軽く両手を頭に乗せた。

「じゃあ、貴方は今から私たちの仲間よ。今日から異能者よ」

龍一の頭の中で、何か力チックと音がした。

鼓膜から伝わって来た音でない。

心の中で鳴った音のようだった。

それと同時に、脳内が白く染まる。

視界も白く染まった。

すべてが純白に染まる。

まるで白紙のキャンバスのようだった。

そこに何かが現れた。

遠くから何かが飛んで来る。

クネクネと長い体を伸らせて飛んで来る。

蛇じゃない。

龍だ。

ドリゴンだ。

「これが、僕の超能力か……」

飛んで来る飛龍は、短い両腕に何かを抱えている。

よく見れば、ドリーンの表情は歡喜に溢れていた。

目を凝らす少年。

その上空をドリーンが渦を巻くように飛び回ると、抱えた何かをばら撒いた。

何かがフワフワと沢山落ちて来る。

「！」、これは！？

白、黒、赤、ピンクに水色。

それは、色取り取りのパンツ。

乙女の羽衣。

女性物の下着だった。

龍一は、綿雪のよつに降り注いでくる女性用の下着の中、ヨン様もビックリなほどの笑みで、両腕を広げながら微笑んでいた。

「パ、パンツだお～～

言葉の詰尾に、ハートマークが咲いている。

「ついして少年の新しい変態物語が始まった。

変態異能者物語のスタートである。

## ドリゴンとパンツの謎

頭の中の霧が、晴れて行く。

耳に町の雑音が蘇りだした。

田の前には、あの婆さんが居た。

椅子に腰掛けたまま呆け眼の龍一を、満面の笑みで見上げていた。

「い、いまのは……」

純白の空間に現れたドリゴン。

そして、パンツの雨。

この婆さんが、本当に超能力をプレゼントしてくれたのならば、あれは幻覚でないだろ？

自分で見たのだ。確信できる。

ドリゴンとパンツ。おそらくあれは、龍一が授かった超能力と、新たな趣味の片鱗。

ドリゴンはカツコ良かつた。

しかし降り注ぐ沢山のパンツは……。

それを思い出した龍一の顔が、不安に濁る。

「どうかしら？」

龍一を下から見上げる老婆が言った。

自分の両掌を眺める龍一だが、何か変化があつたよつには感じられなかつた。

「超能力が、本当に授かつたのでしょうか？」

「もうじやなくて」

首を傾げる龍一。

「な、何がですか？」

「私を見て、トキメキを感じないかしら？」

「ときめき……ですか……？」

苦笑いと共に訊き直す。

そんなもの、微々たりとも感じる訳がない。

しかし老婆は、何かを期待するような眼差しで龍一を見上げていた。

「やつ、トキメキよ。私を見て、キョンと来ない？」

「あませんが……」

龍一が素直に答えると、老婆の顔がどんよりと曇りだす。

肩から力が削げ落ち落胆に沈む様子がよく分つた。

「またハズレなのね。今度こそ上手く行けばと思ったのに……」

そう咳きながら椅子から立ち上がる老婆は、そそくさと後片付けを始めた。

椅子から立つても、座っている時と背丈が変わらない。かなり矮躬のようだ。

椅子や机を折りたたみ水晶や行灯を鞄の中に仕舞いだした。

「どうしたんですか……」

「今日はもうおしまい。疲れたから帰るのよ」

後片付けを終えた老婆は、荷物を背負つと駅の方に歩き出した。

龍一は、と迷ひと歩く老婆の後姿を見送る。

老婆も疲れたと言つていたが、何故か龍一も疲労感を強く感じていた。

体全身が重いし、頭にまだ靄が掛かっている気分が続いていた。

ガラス越しに本屋の店内を覗きこむ。

三日月堂の店長が、本棚の整理をしているのが見えた。

「今日せやんとねいわ……」

立ち読みが目的で三田円堂に立ち寄る積りだったが、ここまで来て  
気分が乗らない。

龍一は、踵を返して駅を越える為の跨線橋を手指す。

帰宅の路に着くまでの道中、龍一はずつと考えていた。

自分が得た超能力とは、一体なんだろう。

老婆曰く、どのよつた能力に目覚めるかは分らないとの事だった。

サイコキネシスやテレキネスのよつた、オカルトでもポピラーなものだろうか。

それとも厨二ぽい個性的な能力だろうか。

スタンダードやミュータントのよつた。

もしかしたら車輪眼とかギアスとかは……ないだろう。

それに強い弱い、使える使えないも大きな問題だ。

せつかく得た超能力でも、えつぴつを転がす程度のサイコキネシスや、長年連れ添つた夫婦が「あれ取つてくれ」「お醤油ですね」みたいなテレキネスではガッカリにも程がある。

だが希望は、白昼夢で見たドラゴンだろう。

きっと自分に目覚めた超能力は、ドラゴンに関係した能力だろう。

しかし一方で不安なのは、降り注いできたパンツである。新しい趣味が、同時に不安を扇いだ。

「パンツか……」

呟きながら視線が、近くを歩く女性に向けられた。

どこかの会社員であろうか。二十歳ぐらいの女性が、スースに短いスカートを履いて龍一の前方を歩いていた。

自然と龍一の視線が、女性の下半身に落ちて行く。

スカートから伸びる美脚が綺麗だつた。ヒップも形が良い。

いつたい彼女は、どのようなパンツを履いているのだろうか。

やはり大人っぽいレースのパンツだろうか。

白だろうか、黒だろうか、それとも情熱の赤だろうか？

ノーパンなんて有り得ないだろうが、そんな変態だつたらガッカリするな。

パンツは文化人の嗜みとして履くべき代物だと思つ。

龍一は、そのような妄想を巡らせながら真っ直ぐに歩く。

女性は龍一が向つ道とは別の方へと曲がつていた。

何故か名残惜しさを感じる。

今度は前方から自転車に乗った他の女子生徒が走つて来る。

短いスカートが、風に靡いて際どく揺れていた。

見えるか！

心で叫んだ龍一の姿勢が若干沈む。

さりげなく、出来るだけさりげなく、好奇心のままに行動する。

「ちつ、残念……」

見えなかつた。

龍一とて年頃の高校生だ。異性に興味を抱く。

しかしここまで異性のパンツが気に成る事はなかつた。

まだ龍一は、自分の中に芽生えた新たなる興味に気付いていない。

住宅街に入った隆一の周りから人気が途絶える。

静かな住宅街では殆ど人とはすれ違わなかつた為、再び超能力に付いてみて考へ始めた。

一つ一つ自分が知りうる超能力のタイプを、潰して行くように試してみるしかないだろう。

それで自分の超能力が何かが解るかもしない。

自室に帰れば様々な超能力を記載した本が幾らでもある。

結局あれこれ悩んだ結果、自宅に到着するまでには何も回答が出なかつた。

「まあ、あせる事はないよな 」

そう言いながら龍一が玄関のノブを捻ろうとした瞬間、唐突にカシヤとカメラのシャッターを押したような音が聴こえた。

「ん？」

後ろを振り返る龍一。

誰も居ない。

なんだらうと思いつ周囲を見ますが、これといつて不審などこりは見当たらない。

静かな住宅街。辺りの色が、夕焼けの為、オレンジ色に染まりかけていた。

いつもと変わらない近所が見えるだけで、歩いている人すら見当たらなかつた。

「空耳かな 」

（氣のせいだらうと、そう思った。）

扉を開いて「ただいま」と声を張ると、キッチンの方から若い声で母が「おかえり」と明るく返して来た。

そのまま階段を駆け上った龍一は、自室で制服から私服に着替えると、『わいしりと詰まつた本棚の前に立つ。

「え～と、 Irene と Irene と……」

数冊の本を手に取ると、ベットに寝そべつた。

どれもこれも幾度と読み返した超能力研究者の本である。

超能力を科学の目線から集録した本だ。

「参考になるだろ？」「

龍一は、夕食までの時間を、結局読書に費やした。

窓の外は、もう暗く成っていた。

時計の針は、七時を刺していく。

一十分ぐらう前に姉も帰ってきた様子だつた。

そろそろ父も帰宅する時間だらう。

「 もう、 10 分な時間か 」

もうじき夕食だらうと部屋を出て一階へと降りていぐ。

結局、自分の超能力が何かは解らなかつた。

## 冷たい姉と奇跡の母

龍一が部屋を出た直後、階段を駆け上がって来るよつこ、一階からスパイシーを良い香りが鼻に届く。

「今日はカレーライスか〜」

龍一の母が作るカレーは実に美味しい。

スーパーなどで市販されている出来合いの固形ルーを使わずに、幾つものスパイスを混ぜ合わせて本格的なカレーを作るのだ。作り方は、料理本で習つたものに、更なるアレンジを加えたオリジナルの一品らしい。

龍一の母は、基本的に何を料理しても美味く作る。

結婚する前の夢が、料理師に成る事だったらしい。

「かーさん、ご飯まだあ〜」

階段を駆け下りた龍一が、そう言いながらリビングに入ると、テレビの前のソファーアには、雑誌を片手に持つた姉の虎子が座っていた。

龍一がリビングに入つて来ても顔すら上げない。

GパンにTシャツ。黒髪を腰まで伸ばしている。

家に居るとは随分とラフな格好をして居るが、出社時は堅苦しいレ

ディーススーツに身を固めたガチガチの公務員だ。

短大を卒業後、市役所に勤めている。

性格はかなりキツイ。

「龍一くん。お父さんがまだだから、先にお風呂に入ってきたなさい」

台所に立っていた母が振り返ると我が子に微笑みながら言った。

地味な服装にエプロン姿の母は、今年で39歳である。

19歳の時に姉の虎子を出産した。今の姉と同じ年にだ。その一年後に龍一を儲けた。

しかし一児の母とは思えないほどに容姿は若々しい。

見た目には、20代後半にしか見えない。

近所の人には、奇跡の39歳と呼ばれているが、性格はおつとりで、時折じれったくもなる天然キャラだ。

母のつかさと姉の虎子は、歳にして20歳近くも離れているが、並んで歩けば姉妹にしか見えないのだ。

美形なのか化粧が上手いのかは龍一に判断できないが、顔もスタイルも綺麗で良く似ている。

だが、性格だけは似ても似つかない。

「ねーちゃんは、風呂入ったの？」

「入った」

ファッション雑誌を読む姉が、素っ気無く答える。  
龍一は、なんだかしらけ気分でリビングを出た。

姉との会話は、じいじ最近いつもこんな感じである。

昔は弟思いで龍一を可愛がり過ぎて苛めに成るぐらい構ってくれていたのに、いつの間にか冷め切った兄弟関係に成ってしまっている。

龍一は、バスルームの脱衣所で衣類を脱ぎながら、洗面所の鏡で顔や背中を確認するように眺めた。

「これといって変化は無いか……」

肉体の変化。

まさかと思うが念の為である。

アメリカのミュータントみたいに、容姿が変貌しては堪らない。

超能力者に幼い頃から憧れていたが、モンスターには成りたくない。

しかし鏡で見るからには、それは無いようだった。

全裸になつて今一度全身を見回し確認する。

「異変は無いな……」

安堵した龍一は、洗濯機に手を掛けて足の裏も確認する。

確認が終わってから龍一は、自分がここまで心配性だったかと苦笑う。

ちょっと過敏に成りすぎていると反省した。

「それにしても俺の超能力って……。とりあえず風呂に漬かりながら考えるか

そう呟いた龍一の視線が、手を掛けていた洗濯機の中に落ちた。

「ん……」

龍一の視線の先には、先に風呂に入った姉の物だろうか、それとも母の物だろうか、どちらの物か判らなかつたが、女性物も下着が入つていた。

白いパンツである。

「……」

静かに固まる龍一。

洗濯機の中の下着を凝視する。

不思議なぐらい冷静だった。

まるで花瓶に活けられた花を観賞しているような気分である。

頭の中から先程まで考えていた超能力の悩みが消え去っていた。

代わりに到来した思考は、止まらない程の好奇心であった。

「うむむ……」

自然と龍一の手は、洗濯機の中へと伸びていた。

温もりを失った白いパンツ。それをしっかりと掴んで捨い出す。

「使用後だよな……」

洗濯機の中に入っていたのだからそりだつ。

「これは……、この感情はなんだらう……」

自分でも戸惑いを感じていたが、好奇心がそれを上回る。動きは止まらない。

洗濯機の中から取り出した白いパンツを両手で持つと、眼前で広げる。

これが、いけない事だとは理解できていた。

これが、母か姉の物だとも解っていた。

これが、変態行為だとも……。

「へ、変態行為……」

その言葉を思い描いた瞬間、老婆の言葉を思い出す。

超能力と共に芽生えるもう一つの感情。新たなる趣味。

今何が自分に起きているかが理解できた。

自分に芽生えた新たなる趣味は、おそらくこれだらう。

思い当たる節もある。

今日の帰り道。女性とすれ違う度に、下着の事を考えていた。

間違いないだらう。

だからこそ、目が放せなかつた。

パンツから

刹那、扉が開く。

「龍一。シャンプー切れてたから新しいの持ってきてやつたわよ

姉の虎子である。

新しいシャンプーを持つた姉と、パンツを持った弟の視線が合ひつ。

しかも、龍一は全裸であった。

硬直する一人。

空気も凍り付いていた。

「あ……、あんた……」

龍一の視線が、姉からパンツに戻る。

更に、自分が全裸であることも肉眼で股間を見て確認した。

「ねーちゃん、これには深いわけが……」

言い訳のしようがなかつたが、やつぱり言い訳がしたい。

「それ……、私の……下着……」

「わざとじやないんだ……」

当然ながら龍一の言い訳は、姉の耳に届かなかつた。

姉の虎子が、弟の為に持つて来た新しいシャンプーを床に落とす。ゴトーンと音が床で鳴る。

一方、弟の龍一は、新しく芽生えた趣味に力が籠もり姉のパンツを落としもしなかつた。

しつかりと持つている。

「おかーーーん！」

姉が叫びながら走り出した。

まずい！！

「違うんだ、ねーちゃん。話を聞いてくれ！」

龍一も走り出す。

全裸のままバスルームを飛び出して姉の後を追つて廊下を走った。

自分が全裸である事を、再び忘れている様子だった。

その時である。

「ただいまー」

玄関の扉が開いて父の源治が帰宅してきた。

「きやあああああああ、変態

「ねーちゃん、誤解だつてば——！」

「……」

玄関で硬直する父、源治。

家族の為に今日も厳しい労働にせいを出し、残業を終えて帰宅してみれば、全裸の息子が両手で白いパンツを持ったまま姉を追いかけている光景だった。

家庭崩壊。

源治の脳裏に、その言葉が過ぎると片手から鞄が落ちた。

娘の悲鳴が、まだリビングから聴こえて来る。

「終わつたな……」

政所家にはカレーの良い匂いだけが平和そうに広がっていた。

## 幼馴染はボーアッシュ（前編）

食卓に並ぶカレーライスとサラダの器を前にして龍一は、父の源治にじりじりと絞られていた。

姉は弟を変態変態変態と連呼しながら一階の自室にひっこんでしまって来ない。

こちらもかなり怒っていた。

姉の部屋に夕飯を運んだ母が、お盆を片手にリビングに戻つて来た。一通りの説教を怒鳴つた父が落ち着くまでに30分近くの時間が掛かった。

流石に龍一も凹んだ。

父の源治は、かなり硬派な性格だ。解り易く言えば、元ヤンである。

現在45歳。仕事は土木建築会社の事務職を務めているが、スーツを着た姿は身形を崩していないヤクザに見える程に凄みがある。

しかも右頬には、刃物で切られたような派手な古傷があるのだ。尚更、堅気には見えない。

頬の古傷に関して父は訊いても語らないが、母曰く、父は若い頃から外見とは裏腹に真面目な性格だつたらしい。

喧嘩もしない、博打も打たない、お酒は飲むが飲まれない。まして

や弱い者苛めなんか有り得ないとの事らしい。

少なくとも母の田には、やう映つていたようだ。

だが、父の若い頃の知り合こと言う人が、たまに家へと尋ねてくるが、どの人も強面である。

しかも殆どのお客が、吉本芸人でもないのに父のことを「兄さん」と呼ぶのである。

その事から父の若かりし時代に、どれ程のやうな仕事を仕掛けしていなかが推測できた。

間違いなく元ヤンキーである。

しかも、かなり格上のヤンキーだ。

だから父に怒られるのは、たまらなく怖い。

おやりく龍一は、一生父には逆らえないだろうと想えていた。

龍一にとつて父親は、身近に在りながら最大の壁なのだろう。

しょんぼりと氣を落とした龍一が食事を終えて白室に戻る。

階段を登る足が、とても重い。

まるで鉄球付きの足枷でも付けられた氣分だった。

「ああ～……、殺されるかと思った……」

咳きながらベットに倒れこむ龍一は、うつ伏せの体制で枕に顔を押し付けた。

まだ思考回路が恐怖でちじこまつっている。超能力について考える余裕が精神力として残つていなかつた。

「もう駄目だ……、今田はもう寝よう……」

寝巻きに着替えようと龍一がベットから起き上がつた時である。力一テンの閉められた窓が、外からノックされた。

「月美かな

龍一がカーテンを開けると、窓ガラスの向こうに見なれた人物が直ぐ側に居た。

月美とは、隣の家に住んでいる幼馴染の女の子だ。

月美の部屋は龍一の部屋の向えにある。家と家がかなり接近している為に、屋根を伝つて来れるのだ。

笑顔の月美が窓の外で手を振つていた。

髪はショートヘアに気の強そつな顔立ち。

白いTシャツに水色インクトップを合せている。

下はひらひらとしたミニスカートを履いていた。

胸のサイズはほどほどだがスタイルは悪くない。  
スレンダーで綺麗だと思う。

健康的な生脚が艶々していて魅力的だった。

歳は龍一と同じ年であるが、通つ高校は違う。彼女は隣町の女子高に通つている。

龍一が窓の鍵を開けると、彼女の方から窓を開けて室内に上がりこんで来た。

「いんばんは、龍一ちゃん」

笑顔で挨拶をする月美は、屋根の上を渡つてくる際に履いていたサンダルを脱いで窓の外に下ろした。

窓枠を間にくの字になつてサンダルを置く月美の仕草に龍一が、「よひ、月美」と挨拶しながら身を屈める。

パンツが見えそうで見えなかつた。

月美は龍一が気さくに話せる数少ない女子の一人である。

「月美、どうした?」

「どうしたのは龍一ちゃんの方でしょ?。虎ねーちゃんも叔父さんもかなり怒つてたじやない」

「いや、まあ……」

どもる龍一。バツの悪やつな顔をする。

おそれくは騒動と説教の大声が、隣の家まで届いていたのだ。つい。流石に恥ずかしい。

龍一がベットに腰を下ろすと月美は勉強机の椅子に腰掛けた。

「まあ、虎ね～ちゃんが怒るのも分るわよ。可愛い弟がさ、まさか脱衣所で自分の下着を観賞してれば幻滅の一いつしちやうね」

「そ、そこまで聞こえてたのか……」

更に肩を落とす。

椅子に座る月美は足を組むと、膝の上に肩肘を付いて顎を置いた。

それから少し怒った顔で言ひ。

「龍一ちゃん、なんで虎ね～ちゃんのパンツなんか手に取ったのよ？」

怒るよつに言ひ月美から俯いて顔を逸らす龍一は、大きな溜息を付いた。

父にも同じことを大声で問われたが、出来心としか答えを返せなかつた。

昨日までは、室内に母や姉の下着が乾してあっても気にすらなかつた。

それが、あの婆さんに出会つてからだ。急にパンツが気になりだしたのは。

今も足を組む月美のスカートの奥が氣に成つてゐる。

正直、月美は可愛い。

今田は珍しく女性ぽい服装だが、普段は髪型も服装もボーアッシュショーンを好む。

小さな頃は殆ど男の子に見えたが、高校に入学した頃から服装も徐々に女の子らしくなり、発育の遅れていたスタイルも女性らしく成つて來ていた。

ボーアッシュショーンキャラからお姉さんキャラに生まれ変わつとしている節が見られた。

女子高でも一年の頃は王子様キャラで通つていたらしいが、最近は月美お姉さまと後輩からは慕われているそうな。

そのぐらい美形であることは間違いない。

「虎ね～ちゃんも、最近ますます美人に磨きが掛かってきてるけどさ。龍～ちゃん、流石に身内のパンツ見て興奮てのはねえ～。しかも洗濯機から取り出したところを見つかるとはねえ～」

そうだ、タイミングが悪かつたのだ。

いつも通り、姉の後、お風呂に入ろうとしたら、たまたま洗濯機に投げ込まれていた下着に目が落ち、思わず手に取つてしまい、そこ

を姉に見られてしまつた。

そうだ。

たまたまが偶然の如く重なり合い、悪いタイミングを積み重ねるようになみ出してしまつただけだ。

言い訳だが、己の口を正当化しなければ、死んでしまつそつな気分であった。

「反省している……？」

「してる……」

俯き、項垂れて、力無く答える龍一。

なんとも寂しそうな顔を見せる龍一を心配したのか月美が眉を顰めた。

そして、椅子に座りながら組んでいた脚を解いて、今度は両膝を合わせると上に両掌を乗せる。

恐縮した姿勢で月美が言った。

「そんなにパンツ……、見たい？」

「見たいと言いますか、なんと言いますか……？」

「ちよつとなら、私が見せてあげようか……？」

「えッ！」

田を見開きながら瞬時に頭を上げる龍一とは裏腹に、月美は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

照れている！？

だが、それが可愛い！！

## 幼馴染はボーアッシュ (後編)

「な、何言つてるんだよ、月美……」

龍一の言葉が震えていた。

動搖している。

生唾を飲んで喉を鳴らした。

「だつてほら、私ばかり見ているのも悪いし……」

「……はあ？」

氣恥ずかしそうに訳の分らない言葉を返した月美は、天井の隅っこを見詰めながら赤面していた。

沈黙。

硬直した龍一が、月見の顔を凝視する。

一方の月美は、沈黙に時折負けたのか龍一をチラ見するが、直ぐに視線を天井の隅に戻すを繰り返していた。

二つの疑問。

ボーアッシュな幼馴染の乙女が、突然自分のパンツを見せてあげると言つのだ。

願つたりな申し出であるが、何故にそのような事を言い出したのか  
が分らない。

そして、その後に言つた言葉。

自分が見ていても悪い。

言葉の真意が不明である。

だが、しかし！

「パンツが見たいです」

消え去りそうな小声だつたが、龍一の本意であつた。

「誰の……、誰のパンツが見たいのよ？」

未だ天井の隅を見る月美が、自分の名前を言わせようと振つてくる。

誘われているのか？

それともおひょくられているのか？

眠か！？

釣られるままで元美の名前を口に出しから、「嘘に決まつてゐじやない、龍一ちゃんキモイ。あはははははあはあ～ん」とか言われて馬鹿にされるのでは。

そのような疑いも想像できたが、すくすくと育つた健康美溢れ出る幼馴染の新鮮なパンツも凄く見たかった。

「ちよつと……、今こじで？」

とつあえず質問で探りを入れる。

月美は細い首で、一度だけ頷いた。

「マジですかあ～……」

思わず出た言葉に月美が「マジですか……」と小声で返してくれた。

月美は幼馴染だ。小さい頃に、幾度となくパンツを見たし、何度も一緒にお風呂にも入った。

そいつ言ひ仲だ。

だが、それは子供の頃の話。過去の思ひ出に等しいし、その頃の月美を龍一は、男の子と思つていた。

彼女を女の子だと意識するようになつてからは、裸どころかパンツすら見た事が無い。

そして、別に見たいとも思つていなかつた。

しかしながら今は、見たい。

力一杯、見たいのだ。

懇願している。

「これは賭けに出るべきだろ？」

例え賭けに負けても、ただ馬鹿にされるだけだ。

しかし賭けに勝てば、現役女子高生が身に付けたままの、生のおパンツ様を揉めるのだ。

勝負に出ない理由が無いだらう。

「龍一ちゃん、見る？」

龍一が打算的な思慮に励んでいると、月美が無垢に問う。

隙を突かれたような表情で龍一が、「うん」とハツキリとした抑揚で答えた。

視線を決して合わせようとしない月美。

視線を月美の顔から外そとしない龍一。

最近大人びて來たと感じていた幼馴染の表情が、随分と幼く見えた。

室内の温度が、少し上がったような気がした。

二人の顔が、一段と赤く熱る。

黙つたまま椅子から立ち上がった月美が、ベットに腰を下ろしてい

る龍一の前にゆっくりとした足取りで歩み寄った。

龍一の眼前で、月美のハニースカートが揺れていた。

細い体をモジモジさせていた。

控えめな膨らみを見せる胸の前で、両手の指を落ち着き無く絡ませていた。

月美の全身の肌が、桜色に染まっている。

「ちよつとだけなんだからね……」

構わない、ちよつとでいいから見たかった。

龍一の目が血走る。

期待に心が膨らみ、若さで別の場所も膨らむ。

しかし、モジモジタイムがじれったく続いた。

待ちきれなくなつた龍一が、幼馴染の表情を窺おうと上を向く。

一瞬だけ一人の視線が合つたが、素早く月美が視線を逸らす。

顔は真つ赤だつた。

とても龍一を騙そうとしている様子ではないし、演技とも思えなかつた。

それを察した龍一の期待が、更に膨らんだ。

麗じゃない。

確信できた。

ならば待とうと決心する龍一。

決心が付かないのは月美の方に見えた。

言つたはいいが、なかなかパンツを見せようと動けない様子だった。

だが、その恥じらいが甘美なまでの蕩けるような空気を漂わせる。

黙り込む一人。

静かな部屋に、時計の秒針が刻む音だけが聴こえて来る。

下唇を噛む月美。

龍一が幼馴染の顔を見つめていると、月美の両手がついにゅっくりと動き出した。

その動きに龍一の視線が下に戻る。

待つていましたと心が躍る。

月美が両手の細指で、自分のニースカートの裾を摘んだ。

龍一の鼻息が荒くなり、時計の微音を搔き消す。

心臓の弾む音が、直接鼓膜に届いて邪魔くさい。

「と、特別なんだからね……」

言葉と共に月美のミニスカートが、少しづつ上昇していく。

綺麗な生足が、少しづつ見える量を増やしていく。

秘密の花園を隠すカーテンが徐々に幕を上げる。

目が放せない。

逸らせない。

瞬きすら忘れてしまう。

龍一の双眸が、異常なほど赤くなっていた。鼻血も出でている。

刹那。

「おおつー！」

見えた。

少し見えた。

よく判らないが、僅かに見えた。

更に露出は増えていく。

白一

否。

青い横しま！

シマパン！

ナイス、ボーアイツシユ！

全部ではないが、間違いなく見えた。

「いいまでー」

静かだつた部屋に張りのある月美の声が響くと同時にミニスカートの裾が下ろされた。

「もうちょっとー。」

いきなりボリュームを上げた月美の声に釣られて龍一も大きな声を上げてしまった。

「だーめー！」

そう言って、あつかんべーと舌を出した月美が、踵を返して入って来た窓へと動く。

ベットから腰を浮かせた龍一が、片手を伸ばすが届かない。

敏捷に窓の外へ出た月美が、上半身だけを反して手を振った。

いつものように微笑んでいた

明るく。

元気良く。

そして、優しく。

「おやすみ、龍一ちゃん」

その言葉を最後に月美は、自分の部屋に窓から入りカーテンを閉めてしまった。

その間一度も月美は、振り返らなかつた。

おやすみの言葉すか返せなかつた龍一は、ただ呆けながら幼馴染が消えた部屋の明かりを眺めていた。

その光も直ぐに消える。

龍一の部屋に、静けさだけが残つた。

「俺も寝よつかな……」

そう言い部屋の電気を消すと、ベットに潜り込む。

幼馴染がプレゼントしてくれた青春の記憶が、龍一の脳裏に鮮明に焼きついていた。

ベットの中で瞼を閉じても消える事無く浮かんで来る。

今晚の宝だ。

良い夢が見れそうだった。

「久々に、自家発電しようかな……」

こうして少年が歩む、新たなる人生の一日目が終了した。

早朝。

龍一が両親と朝食を取っていると、一階から早足で降りて来た姉の虎子が、何も言わずにリビングを横切り玄関に向づ。

母がおはようの挨拶を掛けたが姉はそれすら無視して家を出て行った

今日は平日だしスーツを着ていたから、出社したのだらう。

姉の様子からして、まだ昨日の事を怒っているようだつた。

当然だ。一日で忘れるつのが無理がある。

食事を終えた父が席を立つと、ネクタイを締めながら息子に言つた。

「龍一、虎子が帰つたら、もう一度謝つておけ」

ドスの効いた声は、まるで脅しのような響きがあつた。

食事の箸を止めた龍一が、俯き加減で「うん……」と答える。

父に言われるまでもなかつた。龍一も朝一で姉に再度謝る積りだつた。

だが姉の虎子は、避けるように家を出て行つたのである。

龍一の心は、罪悪感をチクチクと感じていた。

やがて強面の父も会社に出社する為に玄関を出て行く。  
それを母が家の外まで見送った。

父と母は仲が良い。

結婚して20年が過ぎたが、新婚気取りで腕を組み寄り添っているシーンをちょくちょく見る。

近所でも評判なぐらいだ。

まさに美女と野獸と言つか、美女と極道である。

龍一も食事を終えて席を立つ。

そろそろ学校に行く時間だ。一度一階の自室に戻つて鞄を取つてから玄関を目指した。

龍一が玄関で靴を履いていると母がいつもより弁当箱を持ってきてくれた。

「はい、お弁当」

「ありがとうございます、かーさん」

龍一が受け取った弁当箱を鞄に入れていると、更に母が何かを差し出す。

「龍一ちゃん、これで我慢してね……」

いつも微笑みを欠かない母の顔が、眉毛だけをハの字に歪めていた。

母が差し出した物に龍一が視線を落とすと、それは一一つ折りにされたレースのハンカチだった。

三角形に折られたレースのハンカチは、まるで女性物の下着にも見えた。

「か、かーさん……」

龍一が、こまつたような顔で母を見る。だが手は一一つ折りのハンカチに伸びていた。ガツシリと驚掴む。

「かーさん……、ありがと'づー。」

龍一の眼に涙が滲む。

母のつかさは優しく微笑んでいた。

まさに女神である。

流石は奇跡の39歳である。

三角に折られたレースのハンカチをポケットに捻じ込んだ龍一は、「かーさん、これを励みに今日も頑張るよー」と心の中で感謝しながら家を出て行く。

憂鬱だつた龍一の心が、大分癒された想いだつた。

「おはよー、龍一ちゃん」

玄関を出ると、家の前で月美が立つていた。明るい挨拶が飛んで来る。

龍一が幼馴染に「おはよー、月美！」と挨拶を返すと一人は、駅の方へと並んで歩き出す。

朝、学校に登校する際に二人は、いつも駅前まで一緒に向つ。

そこから月美は電車に乗つて隣町に在る女子高に向かい、龍一は入れ替わりで電車から降りて来る親友の卓巳と会流して、一緒に歩いて学校へと向うのである。

幼馴染と並んで登校。

通う学校は別々に成つてしまつたが、この生活習慣は幼稚園の頃から変わつてない。

龍一が、隣を歩く月美をチラリと見た。

ボーリッシュな幼馴染は、健康的にスレンダーなスタイルで、女子高の可憐な制服を見事に着こなしていた。

短いスカートが揺れるたびに昨日の晩の事を思い出す。

龍一がシマパンの事を思い出してにやついて居ると、いきなり月美が「ね、龍一ちゃん」と話しかけて来た。

ドキリとした龍一が、必死に真顔を作つてから「なに？」と返す。

「流石は叔母さん。凄く龍一ちゃんの気持ちを理解しているわね」「

「なにが？」

龍一が不思議そうに問うと、月美が龍一のポケットを「これよこれ」と言いながら突ついた。そこにはレースのハンカチが入っている。

「見てたのかよー？」

「玄関の隙間から見えたよー」

月美が揶揄する田付きで言ひ。

戸惑いながらも龍一は、玄関が開いていたのだろうかと疑問に思つたが、見られていたことには変わらないと肩を落とす。

また月美に恥ずかしいとこ見られてしまつたと情けなく成り憮然と沈む。

「龍一ちゃん、そんなにパンツが好きなの？」

「好きと言ひますか……、なんと言ひますか……」

「恥ずかしさに小さくなる龍一に対しても月美が、何故か勝ち誇つた口調で言ひ。

「まあ、龍一ちゃんも、年頃の男だしね。わざわざのり興味を抱いても仕方ないか~」

「うぬせ~よ……」

龍一が、不真腐れるよつて口を尖らせる。

それが月美には可愛く見えたのか、今までと違つ慶しげ表情に変わつた。

「じゃあ~わ~、また今度、私が見せてあげようか~。」

「マジ~?」

龍一が素早い動きで幼馴染の顔を見ると、月美は逆の方を向いて表情を隠してしまつ。

しかし、ショートヘアーから覗く小さな耳が、真つ赤になつていた。

「た、たまにだつたら……、いこよ」

「マジですか~?」

「マ、マジですかよ……」

完璧に照れている。

だが、可愛い~!

心の中で「よし~」と言ひながら龍一は両手で小さなガツツポーズ

を取つていた。

「その代わり、虎ね～ちゃんのパンツなんか、もう取つちや駄目なんだからね……」「

そつぽを向いたままの月美の言葉は、なんとなく交換条件にも聞こえたが、そんなの龍一には関係なかつた。

なんの問題もなく女の子のパンツが挿めるのだ。歓喜な話である。

「わ、わかつたよ、月美。もう虎ね～ちゃんのパンツには、手を出さない……」

龍一が常識的な事を誓つ。

「見るのも駄目なんだからね」

「わかつたよ、見ない……」

月美が上目使いで龍一を見ながら囁く。

「例え脱衣所に落ちてても、見ちや駄目なんだよ」

「うふ……、絶対に見ない

少し考えてから答える龍一。

「洗濯場に乾してあつても見ちや駄目なんだぞ」

「思わず田に入つた……、とかも駄目?」

「駄目ー。」

円美の目が怒っている。

釘を刺さず円美の声色には、嫉妬の色が窺えた。

「じゃあ……、どうしてもパンツが見たくなつたら……？」

「幼馴染なんだから私に言ひなさいよー。ちょっとだけなら見せてあげるって言つてるでしょ！ 龍ヶちゃんが見ていいパンツは、私のパンツだけなのー！」

「円美、そんなに怒るなよ……。」

「」もで興奮して怒る円美も珍しい。

でも、怒る姿も可愛かった。

「じゃあ、円美」

「なによー。」

円美は少し冷静になつてから返事を返した。

「今、ちょっとでいいから、」もでパンツを見せてよー。」

「ー？」

立ち止まる円美。

龍一のお願いに月美の顔が、下から上へと一瞬で赤くなつて行く。

目が点と成り、頭のてっぺんから湯気を上げて固まつていた。

「駄目か、月美、パンツーーー？」

力を込めて訊く龍一。

戸惑う月美。

小動物のような眼差しで懇願する幼馴染の前で月美は、「ち、ちよ  
つと、なに急に言つてるのよ。」こは外なにさ。ちょっとだけなら  
パンツぐらい見せてあげるけど、外は駄目よ。だつて他の人に見ら  
れるし、幾らなんでもそれは恥ずかしいし。龍一ちゃんにパンツ見  
せるのだつて本当は凄く恥ずかしいんだからね。それを、こんなと  
ころでパンツを見せらだなんてさ。駄目つて訳じやないけれど、急  
すぎて心の準備が付かないよ。私だつて女の子なんだよ。龍一ちゃん  
にパンツぐらい見られるのは我慢できるけど、他の人にパンツを  
見られるのは絶対に駄目なんだから。そもそも龍一ちゃんは、パン  
ツを見せるのがどれだけ恥ずかしいか分つてるの。私はパンツぐら  
いって言つてるけど、真に受けないでよね。本当はすつごく恥ずか  
しこだからね！」と、キンキンと声をあげながら、あたふたと両手  
をバタつかせていた。

照れる月美の様子も可愛くいつまでも眺めていたい。

しかし、パンツも見たい。

その為か、ついつい急かす言葉を龍一が言つてしまつた。

「月美、お願い、パンツを、パンツを見せてくれ！」

一層力が入つていて。

声も大きくなつていて。

拝み倒すように頭を下げる龍一の眼前で、月美が赤面の色を更に濃くしてうろたえる。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよつと龍一ちゃん！？」

「頼む月美、パンツを、パンツ、を、見せてくれ！？」

畳み込むように訊く龍一も必死だつた。

月美が首を振つて辺りを見回せば、数人の歩行者が一人を見ていた。

いつの間にか一人は、駅に近い大通りまで出ていたのだ。

歩行者達の視線が月美に突き刺さる。

好奇心の眼差し、失笑を堪える眼差し、軽蔑の眼差し、様々な視線に月美が気付いた。

離れた場所から「こそ」と話す他高の女子生徒が、「あのカップル、朝からパンツパンツって馬鹿じゃないの」と話す声が微かに届く。

プルプルと震えだす月美。

「りゅ、龍～ちゃんの馬鹿……！」

叫んだ月美が、摔倒ながら頭を下げる龍一の後頭部に平手を落としてバシンと叩いた。

そして大声で、「わああああああ」と泣きながら物凄いスピードで走り出す。

あつといつ間に月美の姿は駅の方へと消えて行つた。

一人残された龍一も、頭を上げてから辺りの様子に気が付いて赤面した。

逃げるよつその場を後にする。

龍一が駅前に到着すると、いつものように待ち合わせをしている卓巳が駆け寄つて来た。

「おい、龍～……」

「お、おはよう、卓巳」

卓巳の表情は、険しかつた。

「おはようじやあねえ～よ、龍～。さつき大声上げながら月美ちゃんが走つていたぞ……。何か有つたのか？」

「いや、ちょっとした喧嘩みたいなもんだよ……」

「喧嘩……、大丈夫か？」

「大丈夫だと思つ。悪いのはほきつと俺だ。夜にでも円美に謝るよ…」

長身の親友は、金髪の髪を搔きながら心配そつた表情で言つ。

「やつした方がいいぞ、龍。お前は女にモテない甲斐性無しだからよ、円美ちゃんに愛想を尽かされたら一生結婚すら出来ない童貞野郎で終わつてしまつぞ。だから絶対に謝れよ、絶対だぞ」

念には念を押された。

「親友とは言え、凄い言いよつだな。……まあ、当つているよつなもんだが……」

「それはそうと、龍。何していたんだよ、いつもの時間よりもかなり送られて来やがつて」

卓巳が携帯電話を取り出し時間を見せる。

「このままじゃあ遅刻だ。走るぞー！」

そう言つと卓巳が走り出した。

何をしていたかを明確に説明しづらかった龍一は、何も言ひ返さずに、走り出した親友の後を無言で追つ。

学校には、あらざつで間に合つたが、これで今晩中に謝らなければならぬ女性が一人に増えた事になる。

姉の虎子と幼馴染の月美にだ。

気が重くなるが、これも皆、自分の責任だ。

頑張つて謝罪しようつと思つ龍一であつた。

## 遅刻寸前のハプニング

幼馴染に対して、路上で認めも憚らずにパンツを見せてくれと懇願したが為に、親友を道連れに駅から学校までの三キロ程をランニングするはめに成った龍一は、廊下で担任の女教師を追い抜いて教室に飛び込んだ。

龍一と卓巳の仲良しコンビに遅れて教室へと入つて来た担任女教師まなみ先生26歳が、やる気の薄い怒りかたで「お前ら、廊下を走っちゃ駄目だぞー」と二人を注意するが、二人は適当に聞き流して自分たちの席に急ぐ。

担任女教師まなみ先生は、サバサバとしたお姉さんタイプの先生である。

いつもジャージ姿でてきぱきと動く彼女は、気の強そうな口調で生徒や他の教師と接し、男っぽい面も多いがやたらと面倒見が良い出来た教師である。

よく見れば薄化粧を欠かさない女らしいところも掛け備えており、人当たりだけでなく容姿も運動神経も申し分なく、男女問わず生徒全般に人気が高い。

だが、独身である。

「ん？」

まなみ先生が教室に入ると、床に何か不自然な物が落ちているのを発見する。

「なんだ、これ？」

短めのポーテールを揺らしながらまなみ先生が、それを拾い上げた。

それとは、龍一の持ち物であるレースのハンカチだった。

慌てて教室に飛び込んだ時に、思わずポケットから落としてしまった物だ。

「誰だ〜、教室にパンティー落としたのは？」

三角に折られたレースのハンカチを拾い上げたまなみ先生が、ヒラヒラと振つて生徒全員に見せる。

「女子諸君、ちゃんと履いているか〜？ 私はちゃんと履いているだ〜〜」

本物のパンツに見えた男子生徒達が双眸を見開き「おお〜〜」と猛然ながら凝視するなか、女子生徒達がザワザワとどよめき自分の股間をスカートの上からさすつて確認を取る。

女子生徒のAさんが言つ。

「まなみ先生。それ、ハンカチですよ……」

「あ、本当だ。私はてっきりパンティーかと思つたよ。つまり、ハンカチか〜」

女子生徒達が安堵に胸をなでるなか、男子生徒達はがっかりと落胆して見せる。

「そのハンカチ、さつき政所君が落としましたよ

龍一が落とすところを見ていたのだろうか、一人の女子生徒が報告する。

その生徒とは、いつも龍一が気を引こうと不順なテレパシーを飛ばしている憧れの女子であった。

隣の列の四つ前に座っている彼女の名前は、鹿沼 翡翠。

龍一が密かに思いを寄せている彼女は、容姿端麗頭脳明晰であるが、運動神経は零に等しいおつとり系である。天然な素振りも多い。

性格は素晴らしい良い子である。ハグしたら一生離れたくないなる程に可愛く、一つ一つの動作が可憐で育ちの良さをフローロモンと一緒に放出しているぐらいであった。

腰まで在る長い黒髪が、とても魅力的で、胸も大きい方である。

正直などこの結婚したい。もちろん将来的な希望である。

しかし、当然ながらライバルは無数である。

鹿沼翡翠は、校内全体の可愛い女子生徒ランキングで一年生の頃からベスト10内にランクインしている。

蓬松高校に通う男子生徒の多くがお墨付きを貰えるほどどの美少女なのだ。

「なんだ、政所。お前のハンカチか？」

まなみ先生がレースのハンカチを突き出しながら言いつ。

「男子が持ち歩くようなハンカチじゃないな。お前は、じひじうのが好きなのか？」

まなみ先生も意外だなと云いたげな顔をしていた。

「それは！」

慌てて席を立つた龍一が走つてハンカチを取りに行く。  
焦つて足が縛れながらも答える。

「母のハンカチを間違えて持つてきましたね！」

手に持つたハンカチを乱暴に奪われたまなみ先生は「そうか、つまらんな」と言うと主席簿を開いて朝の儀式を開始する。  
何がつまらないのかは不明であった。

ハンカチをポケットに捻じ込みながら龍一は、恥ずかしそうに自分の席に着いた。

帰り道で鹿沼翡翠と目が合つた。彼女は軟らかく微笑んでいたが、龍一は思わず顔を背けてしまう。とても恥ずかしかったのだ。

「よりによつて、何でだよ……」

咳きで愚痴る龍一。鹿沼翡翠に見られた事が悔いに成る。

ほんのちょっとの出来事であつたが、甘酸っぱい思いとして龍一の記憶に青春として刻まれた。

傷は浅い。

忘れよ。つ。

この程度のハプニングならば眞もが直ぐに忘れてくれるだろ。ついた。

しかし世間は許さない。

今後このネタは、しばらく尾を引く事に成るのであつた。

政所龍一が母のパンティーをハンカチ代わりに使つてはいるが、謝つた噂が学年内に広まるので、僅か一日と掛からなかつたのである。

## 昼休みの噂話

昼休みの事である。

龍一が卓巳と机を向かい合わせて弁当を食べていると、隣のクラスの男子生徒が教室に入ってきて、一人に話かけてくる。

「な、な、龍~」

彼の名前は鶴岡 又吉。

お調子者で、誰にでも賑やかな口調で話しかける軽い男である。

髪を少し茶色く染めているが、本人は卓巳のようだ、もっと金髪に染めたいらしい。

しかし、その願いが叶わない事を、龍一と卓巳は知っていた。

又吉の家柄は古くから名門で有名な茶道の流派らしい。本来ならば茶髪すら許されない程に厳しい家柄なのだ。

だが、堅苦しい家に生まれ育つたわりには、又吉の性格はなんとも柔軟である。人当たりは軽すぎる程に馴れ馴れしい。

そんな又吉も家に帰れば、厳格な家族やセレブな客人に囲まれ、猫を被りながらお茶をたてている。

想像しただけで笑ってしまいそうな光景である。

「な、な、知っているか、ミスター・オカルト~」

「ん~、何、又吉?」

弁当を食べ終えた龍一が、片付けをしながら返事を返す。

一緒に食事を取っていた卓巳も、もう少しで食べ終わりそうだ。

「ミスター オカルト、面白い噂話を仕入れたぜ。どうだい買わないか?」

龍一は又吉に、しばしばミスター オカルトと呼ばれる事があるが、あまり気にしていない。

又吉が、こう呼びながら近寄つてくる際は、大概がオカルト話をしたい時である。

買わなかと振つてくるが、実際に売り買いを行つた事は無い。

「どんな噂話だ? この前みたいなくだらない都市伝説は厭きたからな~」

この前の噂話とは、いつであった。

町に化け物じみた怪人が現れ悪さを働くと、バイクに乗つた仮面の男が登場して退治すると言つた噂話である。

この都市伝説は、昭和47年ぐらいから噂されるよつになつた話で、最近では都市伝説の一つとしてインターネット上でも多く語られて いる。

怪人は、人間を外れた外見をしており、人間の遺伝子に、まったく別の生き物を足したような化け物で、中には機械と融合した者も居

ると云われている。

そのような怪人が、何処からともなく表れて、人を浚つたり殺したりするらしい。

時には世界征服を目論み、秘密結社として影で暗躍しているとも噂されている。

オカルトに興味を持つている人物ならば一度くらいは聞いたことがある都市伝説だが、逸脱した内容のせいで信憑性は低い。

「いやいや、今回の話は、もつと身近な話だぜ」

又吉はオカルト話が好きな訳ではない。基本的に情報が好きなのだ。

いろいろ人といろいろな情報を交換して、更なる情報を手に入れる。そうやって人間関係を広げて行きながら知識を収集するのが好きなのだ。

生まれ付いての情報屋みたいな男である。

そして又吉が話をわざわざ龍一のところに持つて来る理由は、自分が持ち込むオカルト話の信憑性を確かめ、その上でうんちくを学びたいからである。

ただの噂話も、それなりの知識が有る人物の意見を取り入れれば、一段と面白い話になるからだ。

又吉の中で、自分が知る人物では政所龍一が一番のオカルト研究家なのだ。

龍一の意見を取り入れたオカルト話ならば、この後に同じ話を聞かせる相手の反応が、大きく違つてくる事を又吉は知つていた。

良い情報で、内容が詳細な物ならば、相手の受けが良いのだ。

龍一も又吉が持つてくる噂話には、感謝している。

自分は女の子と話のが苦手である。身内や月美以外の女の子と話すと、直ぐにじもつてしまつ。

だから女の子が好むような噂話や都市伝説の類は、いつも又吉が運んでくるのである。

彼の持ち込むスピードは、時にネットよりも早い時があるからだ。

「身近つてなんだ？」

又吉に訊いたのは、弁当の蓋を閉めたばかりの卓巴だった。

それにも又吉が答える。

「パンドリ爺婆の噂だよ」

「パンドリ……」

又吉の話に龍一は、先日自分が会った老婆の顔を思い出す。

自分に超能力をプレゼントしてくれた老人だが、未だどのような超能力が備わったかは不明である。

「ハンドラじじばば？ パンドラって言つたら、108の災いが入つていたって言つパンドラの箱の……あれだろ？」

卓巳の質問に、今度は龍一が答えた。

「ギリシャ神話だよ。

プロメテウスが天界から火を盗み、人間に与えてしまつた事を怒つたゼウスが、他の神々に命じて『女性』を作らせた。肉体を泥から作られ、男性を苦惱に追い込む我が儘な魅力と、獣のような恥知らずな心を与えられた女性。それがパンドラだよ」

「ほつほつ」

「パンドラって泥なんかい……」

卓巳と又吉が、淡々と語る龍一のうんちくに耳を傾ける。

「そしてゼウスはパンドラに一つの壺を持たせると、プロメテウスに彼女を贈り物としてプレゼントするんだ」

「壺？ 箱じゃないのかよ」

又吉が訊くが、龍一は首を横に振つてから答える。

「今ではパンドラの箱として有名だけど、この話が一般に広まる前の古い書物では、壺と書かれている事が多かつたんだ。それが世間に広まる途中で、箱としての方が有名的に広まつたんだよ。実際は、箱なのか壺なのか、どっちが正しいかは僕にも解らないけどね」

今度は卓巳が言つ。

「で、確か、その道中でパンドラちゃんが、好奇心に負けて箱か壺だかの蓋を開けて、世界に108種の災いが広まるんだよな」

「大まかには、そうだけどね。もつと細かく言つならば、プロメテウスはゼウスの贈り物を拒んだんだけど、弟のエピメテウスがパンドラの美しさに引かれて結婚してしまつんだ。その後、パンドラが蓋を開けてしまう。彼女は、災いを世界にばらまく為だけに生み出された女性なんだ」

「パンドラちゃんって、既婚者だつたのか……」

そこまで説明した後に龍一が、「それでパンドラ爺婆ってなんだよ？」と、問う。

「なんでも一年前ぐらいから、急速に浮上し始めた噂話で、まだネット上にも掲がっていない話なんだけどな」

又吉の顔は、無邪気に笑っていた。

「この素度夢町と、隣の後母等町に出没する怪人らしいんだ」

「怪人……」

怪人と云われ龍一が、眉間に皺を寄せた。

確かに超能力をプレゼントしてくれると言う点では、怪人かもしれないが、自分が行き当たった老婆は、水晶を前にした占い師風だった。怪人と呼ぶほどに奇怪でもなかつたと思つ。

それに爺婆つて事は、爺さんと婆さんの一人と云つ事だらう。  
それも龍一の体験と異なる。

自分の場合は、老婆しか居なかつた。

「なんでもよ、そのパンドラ爺婆つてのに出会うと、超能力が貰えるらしい」

そこには、龍一の体験と類似している。

ただ、本当に自分に超能力が備わつたかは不明だが……。

「それで、そのパンドラ爺婆つてのは、一人居るのか？」

卓巳が問つ。

龍一は、ナイスと思う。そこも知りたい疑問の一つだつた。

「ああ、一人居るらしい。爺の方が、後母等町に出没するうじへ、婆がこの素度夢町に現れるらしいんだ」

「じゃあ、婆は、この町に居るんだな。何処に行けば、会えるんだ？」

卓巳の質問に、それは分らない、と又吉が答えた。  
俯いて考え込む龍一。

やはり龍一の出会つた老婆は、その婆の方だ。

この噂は、本物だ。

「龍一、聞いたか。超能力が貰えるんだってよ。本当ならスグーな。俺等も貰いに行くか？」

冗談混じりに言つ卓巳は、話の根本を信じていない様子だった。

もともと卓巳は、超能力や幽霊などの類は信じてない。しかし、否定もしていない。オカルト現象が、存在しようがしまいが関係ないと考えていた。

だからオカルト好きの龍一とも親友関係が築けている。

「でも、この話には、まだ後があるんだよ」

語る又吉の顔に、怪しげな影が掛かり不気味な口調に変わる。

「なんでもよ、パンドラ爺婆に会つと超能力が貰えるけど、その代わりに人格まだ変貌するらしいぜ……」

「人格が変わつてなんだよ？」

質問を反す卓巳の横で、龍一の顔が曇る。

龍一の脳裏に、新しい趣味と言つ老婆の台詞が流れた後に、ドラゴンが運んで来たパンツの雨が思い浮かんだ。

そして更に又吉が怪しさを深めながら言つ。

「パンドラ爺婆に、超能力を貰つた人間は、その後、殺人鬼に変貌するらしいぜ」

殺人鬼！

龍一の背筋が一瞬伸びた。

「殺人鬼に成るつて、どう言ひ事だよ？」

「ほら、三ヶ月ぐらい前に、C組みの江田島つて奴が、暴力事件で退学させられただろ」

覚えている。確か、自分の父親をバットで殴りつけて病院送りにした事件だ。

ニュースにも成った。

バットで殴られた父親は、一命を取り留めたらしいが、死んでも可笑しくない重症だつたらしい。

「あいつが事件を起こす数日前に、変な婆に出会つたとか言つてたらしい。その話の裏は、クラスメートから俺自身が取つてるから間違いない」

「マジか！？」

「それだけじゃないぜ。一年の女の子が、一ヶ月前から失踪しているんだが、彼女も後母等町で変な爺に出会つたて、周辺に語つていたらしい。

確認こそ取れていなが、別の学校でも、似たような話が上がつているとか……」

最後に間を置いた又吉が、神妙な顔を作りながら考え込んでいる龍

一に、「どう思つ、ミスター・オカルトは？」と訊いた。

少し考えてから龍一が答えた。

「今のところ情報が少なすぎるし、良くある厨一臭い話だ。C組の男子生徒の暴力事件や、一年の女の子が失踪した事件とも、因果関係がなさすぎる。失踪と暴力事件では、一緒に出来ないし、まだ誰も死んでないんだろう。殺人鬼って言つてもな……」

自分が殺人鬼に成つてしまふのかと、不安が過ぎつた。

だから、否定氣味の意見に成つてしまつ。

「現段階では詳細の意見は述べられないけれど……」

「けど？」

「身近で、この町と隣町で起きている事件ならば、まだ調べようが有るかもしれないね。手の届く範囲内の事件、そこに興味が持てるよ」

興味どころの話ではない。真相を見極めたい。

「なるほど……」

今度は又吉が考え込む。

龍一の意見は、遠回しだが自分に調査しようと云つてゐるよつたものだつたからだ。

「分かった、もうひょっと情報が集まつたら出直すよ」

「そう言って踵を返そうとした又吉を龍一が、「ちよつと待つた」と呼び止める。

「調べる気が有るなら、調査内容をリクエストしていいかな？」

カツヒ、又吉の顔が明るくなる。

「何だい？」

「パンドラ爺婆も気に成るが、その老人達と出会つた生き証人を探してくれ。あと本当に超能力を貰えるなら、どんな超能力を貰えたかだ」

「龍一、否、ミスター・オカルト。僕を舐めているのかい。そんなの君に言われなくても心得ているよ。僕の夢は茶道の家元を継ぐ事じゃない、探偵小説などに出てくる情報屋に成る事だ。夢はハードボイルドの脇役だぜ。任せておきな」

「もつといい夢を持とうぜ……」

ミュージシャンを夢見る卓巳が、心配そうに又吉を見た。だが、ご機嫌で又吉は踵を返すと教室を出て行つた。

新たな情報を求めていた。

しかし、誰も気付いていなかつた。

クラスメートもだ。

三人が、オカルトチックな会話を繰り広げている間、龍一の席の隣の列、四つ前の席で昼食を終えた鹿沼翡翠が、読書をするふりをして、三人の会話を熱心に盗み聞きしていた事を。

「あら～、翡翠～。読んでる本が逆だよ……。あんたそれで本が読めるの？」

逆さまに持った本を読んでいる翡翠に気付いたクラスメートが訊くと「あ、本当だ！」と惚けてみせる。

## 謎の二人組み

蓬松高校、校門側。

一台の黒いバンが停車していた。

車内の運転席と助手席に、人影が見える。

「なんで俺等が、張り込みみたいな事をせにゃあならんねんだ」

運転席のハンドルに顎を乗せながら男が言った。

「仕方ないだろ。暇なのは私達ぐらいしか居ないんだからさ」

頭の後ろで腕を組みながら、シートにふんずりかえる女が答えた。

やる気の無い態度で話す男女の目線は、フロントガラス越しに、校門を潜り下校して行く生徒たちを見ていた。

一人一人の顔をチャックしている。誰かを探している様子だった。

男女共に、二十歳ぐらいだろうか。

男の方は、だぶだぶとした白いジャージを着た茶髪で、極道でもなく、堅気でもない風貌をしていた。

女の方も、同じぐらいにケバイ容姿をしていた。化粧も濃い。スナックのホステスのようだ。

一人は、中途半端なチンピラのカップルに窺えた。

「でも、探すつたてよ、解つているのがアップの顔写真だけだろ。それに本当に、この学校の関係者かも解んないしよ~」

そう言いながら男は携帯に映る少年の顔を見た。

「年頃からして生徒と予想できるし、桜ちゃんの念写真は信用できるわ。

それとも夏子さんに代わって、写真だけを頼りに家の方を探して回る?」

「いや……、そっちの方が、かつたるそつだから御免蒙るわ……」

「でしょ~。じゃあ」」」で、生徒を見張つてましょ~。居なかつたら居ないでいいんだしさ。見つからなかつたつて三日月堂に報告すればさ~」

「だな~」

男がチラコと女を見てから訊く。

「ところで、今も入れているの?」

男の質問に女は長い髪をかき上げてから答えた。

「当然よ~。入れてないと寂しいもの」

女の眼差しは、怪しくも魅力的に潤んでいた。

「」の前で、通販で新製品を買ったのよ。今度はリモコン付で、連続6時間使用可能なのよ。防音もしっかりしているからモーター音が外に漏れ難いのよね。だから野外でもバッテリなのよー」

女の顔は、ピンク色に火照っていた。

「へへ、そりなんだ~」

男は詰まらなそうに応えると、視線を生徒たちが潜る校門に戻す。

その時である。

丁度、龍一が車と一緒に下校して行つた。

「ビンゴー、見つけたぜ！」

「わあ、本当だ！ 張り込み初日で見つけられるなんて私達つてばラッキー」

男が車のキーを回してエンジンを掛ける。

尾行の開始である。

## 下校時のトラブル

いつものように卓上と一人で下校した龍一は、駅前で親友と別れてから暫く街中をうろついていた。

素度夢駅を中心にして、ただ歩き回る。

目的は一つ。

昨日の占い老婆を探してであった。

「今日は、居ないのかな……」

老婆と出会った本屋前を中心として、何度も駅周辺を回つては、また同じスタート地点に戻つて来るを繰り返していた。

しかしながら老婆どころか占い師の姿すら見当たらなかつた。

占い師が街角に姿を現すのは基本的に夜が多い。

路上の占い師の多くが、酒が入ったサラリーマンやオーラーを相手にした商売を行なつてゐるからだ。

そもそも龍一が老婆と出会った時間帯に、占い師がテーブルを出している事態が早過ぎたのだらう。

だが、そんな明るい時間帯に占い師の老婆が居たのは事実である。

龍一が上を見上げてビルの頭越しに空を眺める。

空が橙色から黒に色を変え始めていた。

「 もうそろ帰らうかな…… 」

結局のところ老婆は見つからなかつた。

ポケットから携帯電話を取り出した龍一が、時間を確かめながら歩く。

もう六時半を過ぎてゐる。

シンチ！

「あー？ すみません」

携帯電話の画面を見ながら歩いていた為、前方から歩いてきた人物と肩がぶつかり合つてしまつた。

龍一は、相手の顔を確認するよつも先に謝罪を口に出す。

しかし 。

「 いててて。」一ちゃん、人にぶつかつといてよお、謝つただけで済むと思つてゐるのかあ、ええ、あ、よお？ 」

露骨に因縁を掛けてくる男は、とてつもなく頭が悪そつた喋り方だつた。

黒い革ジャン。黒い革のパンツ。髪型は、ポマードで固められたり

一ゼント。金のネックレスに、指には髑髏のリングが幾つも嵌められていた。

時代錯誤な口カビリー風の不良少年。

面容も極上な悪さを備えていた。

「す、すみません……」

謝罪程度で済まさないと述べた口カビリー風の不良に対して、再び謝罪を述べる。

一度目の謝罪を口に出しながら龍一の視線が、革ジャンの胸元に描かれた刺繡に移った。

蜘蛛の巣に逆さで映る大蜘蛛の刺繡。

龍一の脳裏に、幾つかのキーワードが並んだ。

大蜘蛛の刺繡。

上下黒の革ジャン。

口カビリー風の不良。

この三つから出るイコールの回答は、一つだった。

この素度夢町を縄張りにする少年不良集団。

ジャイアントスパイダーズ。

悪い噂が絶えないチーマー。暴力少年グループである。

自分が出した回答に、表情を強張らせる龍一。

一方の不良少年は、怒りに表情を鋭くしていた。

この町で、普通の学生生活を過ごしている少年少女達ならば、出来るだけ関わり合いたくない集団である。

その内の一人と肩をぶつけてしまったのだ。

己の不注意を、呪わずにいられなかった。

「なあ～、にーちゃんよ。このよとしまえ、どうせけてくれるんだあ～？ 肩が砕けたぞ、まちがいねえ～ぞお～」

わざとではない。不慮の事故。悪気はなかった。その程度の言い訳が通用する相手ではない。

常識的なモラルが通じない、ろくでなしだある。

そのろくでなしが、表情を険しくしながら龍一の肩に腕を廻して来た。砕けた箸の腕でだ。

「ちよっとここでだと何だなあ～。向こうで話さへや、なあ～

そつ言いながら足を裏路地の方に進めて行く。龍一は、強制的に連れて行かれる形となる。

これはヤバイと神妙に悩む龍一は、カツアゲされる自分を想像していた。

暴力は嫌いだ。

嫌いな理由は、暴力が苦手だからだ。

振るうのも苦手だが、何よりも振るわれる方が苦手である。

不良が怖い訳ではない。

家に帰ればヤクザ顔負けの顔面を有した父がいる。だから強面には慣れていた。

それでも暴力は別である。

痛みへの恐怖は、動物としての本能が嫌うのだ。

そして今肩を組む口カビリー風の不良は、龍一が嫌っている暴力を好む集団の一員である。

平気で人を殴り、憤怒に任せて喧嘩を行なう。

だから苦手なのである。

「なあ、いくら持つてる?」

既に龍一たちは、人気の無い細い路地にたつていた。ビルとビルの隙間である。

「金だよ、かうねえ。財布出せよ、かういふうへ

龍一の耳元で不良少年が、囁くように強請る。

「感謝料だよ。じつちどらあへ、肩が砕けてんだ。感謝料をくれつて言つてんだよおへ。とつとと出せや、ゴラア！？」

他者への恐喝。列記とした犯罪行為だが、不良少年には罪の意識がない様子だった。

龍一の肩に廻した腕に力が入り、コサコサと揺さぶつて強請つて来る。

龍一の脳裏に幾つかの選択しが並んだ。

選択肢一。大声を出して助け呼ぶ。

遅い。もつ遅すぎる。助けを呼ぶなら、こんな裏路地に連れられて来る前に騒ぐべきだった。

却下である。

選択肢二。尚も謝つて許しをひつ。

駄目だらへ。ここまで来て許してくれるなら、とくに許していただろう。

絶対に殴られるだらへ。

却下である。

選択肢三。反撃を行なう。

駄目だ。暴力は苦手だ。痛いのは嫌いだ。絶対に勝てない。

却下だ。

自分が不良少年に暴力で勝てるわけがない。

だが、なんだろ？

この人の足元。何かが可笑しい。違和感を。

「なあ、金だせよ。それでよ、勘弁してやるから。なあ、観念しろやあ」

今見えている状況。その違和感を打ち消すように動けば、危機が乗り越えられる。

そう、感じられる。

これは違和感……？

否、直感なのか？

「おい、聞いてんのか～？ にーちゃん、つよー」

体を寄せ合つ状態で、横に頭を振るつた不良少年が頭突きを打ち込んだ。

龍一の頭に振動が響く。

痛み。

危険。

排除。

その言葉が龍一の脳裏で駆け巡った。その次の瞬間には、龍一の体が動いていた。

振り上げた片足が力強く不良少年の片足を踏みつけた。

「やめやめ！」

不良少年は、予想外の反撃に悲鳴を開けて顔を顰めろ。

踏まれたのは足の小指だった。

ブーツの上からだつたが、まるでハンマーで潰されたような激痛が、爪先から脳天田掛けて駆け上っていた。

また、違和感に気付く龍一。再び感じ取った違和感は、不良少年の顎先だつた。

「そこを打てばいいのかな？」

口走ると同時に手が出ていた。

左のロングフック。

大きく振られた龍一の拳が、遠心力を孕み不良少年の顎先を横から強打した。

拳打に不良少年の頭部が細かく揺れた。

視界に幾つもの白い星が飛び交う。

頭蓋骨の中で脳味噌が、プリンの如くプルプルと激しく揺れると不良少年の意識が何処か遠くに旅立つ。

脳震盪。

ダラリと口を開き、半開きの瞼から左右別々の方向を見る瞳が覗いていた。

先程までの血氣盛んな表情が、完璧に失われていた。

内股で膝から崩れ落ちる不良少年は、ビルの壁に寄り掛かるような体制で止まり動かなくなってしまう。

「」「これは……、何?」

不良少年を殴り倒した龍一が、まだ暴力の余韻が残る己の拳を凝視していた。

「俺が……、倒したのか?」

気を失った不良少年を見下ろす。

「僕が喧嘩で勝つた……」

これが自分にプレゼントされた超能力の一端だと龍一が気付くのに  
は、もう少し時間が掛かるのであつた。

龍一は、この場を逃げるよう後にした。

## それぞれの勘違い

自宅に帰った龍一は、家族団らんの食事を終えると、少し温めの風呂に漬かりながら考え込んでいた。

姉の機嫌は、直っていなかつた。

龍一が不良少年を殴り倒して帰宅した直後、姉の虎子と玄関で出くわしたのだ。姉も会社から帰宅した直後だつたようだ。

龍一が暗い顔で謝罪を述べたが、聞いてもくれなかつた。ヒールを脱ぐとすぐさま一階の自室に駆け上がりついてしまう。

食事の際も、家族全員の前で再び謝罪を述べたが無視された。

父や母は、無視を決め込む姉の虎子に対し、龍一に味方するような言葉を掛けてくれていたが、やはり姉の怒りが収まる素振りはなかつた。

姉の虎子は、食事を終えると何も言わずに一階の自室に帰つてしまつ。そして部屋に閉じ籠りそれつきりだ。

食卓を囲む三人に、ただただ氣まずい空気だけが残つてしまつ。

食後風呂に入った龍一は、湯煙が溜まる天井を眺めながら、当分このような状況が続きそうだと予感を強めていた。

「虎ねーちゃんの機嫌が直るまで、少し待とうかな……」

下唇が湯に漬かる寸前まで体を沈めた龍一が、ぽつりと呟いた。

湯船は暖かいが、心が若干寂しく寒さを感じる。

「それとも、顔を合わせる度に謝ひつか……」

自分で言つてから龍一は、後の意見の方が良いだろつと想つ。その方が、誠意有る謝罪ではないかと考えた。

「虎ねーちゃんに、嫌われつぱなしは嫌だよな……」

昔の事を思ひ出す。

小さな頃だ。

姉とは一つ歳が離れていた。それでも小学生ぐらいまでは、姉や幼馴染の月美とでよく遊んだものだつた。

女の子がするようなママゴトやゴム飛びなどもやつたが、どちらかといえば男の子がやるような遊びが多かつたと想ひ。

幼い頃からボーグ・シューな月美は勿論ながら、男勝りな氣立ての姉であつたから、やんちゃな遊びが多かつたと思ひ。

鬼ごっこや隠れんぼ、野球やサッカー、木登りもよくやつた。隣の町内の悪ガキ達と、喧嘩もやつた。

子供同士の喧嘩の思ひ出。

姉は度胸が据わっていたし、月美は運動神経が異常に良かつた。

だから女の子にも関わらず男の子と対等に喧嘩が出来た。

度胸も運動神経も乏しい龍一は、それを後ろからいつも見ているだけだった。勿論、応援はした。

そんな自分が情けないとしつことより、一人の強さに憧れたものである。

姉の虎子は、弟の龍一に対して、いつも優しく、暖かく、時には意地悪だった事もあるが、弟思いの素晴らしい姉だったと思つ。

龍一は、そんな虎子を慕つていた。

正確に言えば、姉に恋をしていたのかもしれない。

幼馴染の月美よりも、血の繋がった姉の虎子に、恋していたのかもしれない。

勘違いかもしれないが、初恋だったのかもしれない。

でも、中学一年の頃、姉はグレた。

見事にグレだ。

制服も乱れ、髪を金髪に染め、化粧も濃くなり、ポケットの中にはいつもメリケンサックが隠されて有つた。

噂で聞いたが、素度夢町で一番強いスケ番だつとか。

しかし、姉も女性である。

乙女であった。

高校生になつた姉は、クラスの優等生に恋心を抱く。以来、急に不良を卒業して真面目な女性に戻つた。ちょっと強気な女性にだ。

周囲の驚きを余所に、二人はカップルになつた。

だが、半年もせずに一人は別れる。

姉が振られたのだ。

噂でしかないが、姉を振つた男は、現在のところ、ドラム缶にコンクリート詰めて海に沈んでいるとか、いないとか……。

姉は、真面目を装つていたが、影でスケ番を続けていたのだ。

激昂した姉に始末されたとか、姉を慕う不良たちに始末されたとか、色々な噂が流れたが、真相は不明である。

その後も姉は、真面目な仮面を被つたまま高校生活を送り続け、影ではスケ番としての顔役を務め続けた。

しかし失恋がそうさせたのだろうか、男性を避ける傾向が見られ始める。

龍一とも会話が少なくなつた。

彼女の方が弟を避けている様子だった。

それもここ最近では、随分と直った感じで、昔の様に仲良く会話をするように成っていたのだが……。

龍一が、姉のパンティーを鑑賞する現場を見られて、ぶり返してしまっている。

「そうだ……、もう一人怒っている奴がいたつけな……」

幼馴染の月美である。

「まあ、月美はいいか。あれは、いつも気まぐれだ。謝れば直ぐ許してくれるだろ?」

甘い考えであるが、本当である。月美は、そのような女の子である。

湯から左手を出すと龍一は、力を込めて拳を握り締める。

今度は、今日行なった喧嘩の事を思い出す。

「あれは……、あれが、超能力なのか?」

人気の無い路地に連れ込まれて、カツアゲされた。

その相手に感じた違和感。

相手の爪先、小指に落とした踵蹴り。

一撃で相手をKOさせた、左のフック。

そのどちらも、自分で摸索した攻撃と呼ぶよりも、何かに導かれる  
よつこ出した答えを、その者に操られて繰り出したような感覚だつ  
た。

何よりも、度胸も運動神経も少ない龍一に、不良少年を殴り倒せる  
訳がない。

今まで喧嘩で勝つたどころか、ろくな暴力すら振るつたことがない  
のだ。

それが、あの時。

攻撃ポイント、相手の隙、弱点を感じ取り、更に一番有効的な最大  
限に威力を發揮する攻撃方法をインストールされた感覚だつた。

そして体が勝手に動いた。

結果、不自然なまでの勝利。

それが、龍一が感じ取つたすべてである。

「俺が、あの婆さんから貰つた超能力つて……、これなのか」

龍一の推測が正しければ、己に授かつた能力は、相手の弱点を自動  
的に知り、その対処法を実行する完全なる戦闘用のスキルだ。

「嬉しく……、無いな……」

今更、喧嘩が強くて何になる。

幼い頃は自分も強くありたかったが、今は違う。

超能力に憧れていたが、強くなりたいからではない。

ヒーローに、正義の味方に、最強の戦士になりたいわけではなかつた。

山男が山に登る理由は、一つだ。

そこに、山があるから。

龍一が、超能力を欲しがつた理由は、憧れた理由は、それと類似する。

そこに、超能力があるからだ。

だから得た超能力で、人助けに励む気もなれば、悪用して利益を得ようとも考えていなかつた。

ただただ、研究したかったのだ。

「ふう、のぼせそつ……。そろそろ上がるつか

風呂を上がつた龍一は、寝巻きに着替えてから脱衣所を出て行く。

まだ湯気を上げる髪をバスタオルで拭きながら廊下を歩いていくと、父の源治がリビングから出てくる。

片手には、本屋の紙袋を持っていた。龍一がよく通っている駅前の

本屋、三田町堂の紙袋だった。

「龍一、ちゅうといいか?」

「なに、父さん?」

父は廊下まで出でてみると、手に持つた紙袋を龍一の方に差し出した。中には何かの雑誌が入っている様子であった。

本屋にちょくちょく通りに来た、お父さんからのプレゼントだ。何となく悟れた。

「これをお前の為に買つて来た、お父さんからのプレゼントだ」

「プレゼント?..」

珍しい話である。

「母さんには、内緒だぞ」

父は真剣な表情で言った。

「私がお前ぐらこの頃には、同じような思い出がある。若ことは、そのような事柄との格闘ともいえよつ」

「格闘?」

父が差し出した紙袋を受け取りながら龍一は、首を傾げた。

格闘と述べた父の言葉から、袋の中の本は、何かの格闘技雑誌なの

かと考えた。

そのまま紙袋のセロハンを剥がして中の本を覗き見より口を広げる。

「龍一、お前の趣味がどうであれ男である以上は当然の事だ。だがな、実の姉は駄目だ」

何を言つてこる、父よ、と心で思つ龍一。

「お前の好みが年上の女性でも、我慢が肝心だ。それで暫くは我慢しなさい。その我慢に耐えられないなら、早く彼女を作りなさい」

父の言葉を聞きながら紙袋から雑誌を取り出した。

「えー?」

H口本だった。

タイトルは『エレベーターおねーさんの誘惑白書』である。

表紙には、おねーさん系の女性が卑猥なポーズで映っていた。

踵を返す父が、渋く呟く。

「隣の月美ちゃんが、虎子のよひにH口イタイプの娘さんだったら、私も苦惱せずにすんだらうにな……」

父の源治は、母のつかさが待つリビングに帰っていた。

「父さん……、貴方は勘違いしています。何かを勘違いしています  
……」

今度は龍一が呟くが、それは父の耳には届かない。

溜め息をついた龍一が、階段を上って自室を出出す。

それでも父のプレゼントを、ちゃんと部屋へと持ち帰るのであった。

部屋に帰りベットに寝そべる龍一は、早速父のプレゼントを鑑賞し始める。

「おお、これは……、なんとも……」

おねーさん方の全裸ヌード写真には、大きな興味が湧かない。

それでも数あるページの中には、全裸じゃないヌード写真も多々あつた。

なんともセクシーなランジェリーを身に纏つた女性たち。その下着が龍一の扇情を煽る。

たまらない！

そこには天国が広がっていた。

刹那。

ガラガラガラ！

「えつーー？」

突然、窓が開いた。

いや、開けられた。

隣に住む、幼馴染の月美である。

「り、龍ちゃん……。叔父さんから何貰つて読んでるかと思つたら、え、え、えつちな本だなんて……」

呆然とした表情で述べる月美は、随分と幻滅感溢れる声色で言った。

「いやいや、これは違つんだよー！」

焦りながらも言い訳に凹惑つ龍一は、咄嗟に見ていたページを広げたまま月美の方に突き出した。

両手で広げられた工口本のページには、黒いスケスケパンティーを履いた、なんとも妖艶なおねーさんが、下品なポーズを取つていた。

それを見せられた月美は、顔面を真つ赤にさせながら大きな声を出す。

「龍ちゃんは、そういうのが好みなのーー？」

「好みって訳じやないよ、嫌いじやないけどーー！」

「やつぱつやうなんだ……」

一步引いてから顔を責める円美は、全身を硬直させながら震わせていた。

「勘違いするなよ、月美。今お前、勘違いしようとしているだろー。」

「勘違いなんかしないわよ、私だって頑張れるもんー。」

「えつ……？」

何を頑張る積りだらうか、思わずキヨトンとしてしまう龍一を余所に、興奮した月美は屋根の上を駆けて自分の部屋に飛び込んで行った。

窓を乱暴に閉めて、カーテンを素早く閉める。

「間違いなく、月美は大きな勘違いをしているな……」

龍一の言つ通りだらう。

しかし龍一の胸に飛来した思いは、不安よりも期待であった。

勘違いした円美なら、きっと凄い事を仕出かしてくれるだらうと期待が出来る。

ノックの後に母が部屋に入つて来た。

「龍ちゃん、月美ちゃんの大声が聞こえて來たけど、どうかしたの？」

龍一は父からのプレゼントを咄嗟に布団の中へと隠した。

「な、なんでもないよ。心配ないからだ……」

「や、そつなの～。あんまり月美ちやんと喧嘩しちゃ駄目よ」

セツの言ひと母のつかせば、ドアを閉めて一階に降りて行く。

父との約束は守れた。母には秘密に出来た。

だが、何故に月美の時は、咄嗟に工口本を隠せなかつたのだろうかと悔いだ。

自分が得た超能力は、日常生活でのハピニングに対応して、答えを出し、実行する能力では無いようだ。

「やつぱり、喧嘩だけで発動するのかな……」

ベットに寝そべつた龍一は、そんな事を考えながら、再び父のプレゼントを開いて鑑賞する。

とつあえず自家発電に取り組み生暖かい汗を流すのであつた。

二夜連続のチャレンジだったが、若さが勝る。

いつの間に少年の一冊が過ぎ去つて行く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2845y/>

---

変態超能力をプレゼント

2011年12月30日22時46分発行